生き方リサーチ

豊かだけど不安な中で――

「自転車創業」の時代

新年明けましておめでとうございます。昨年を表す漢字には「新」が選ばれていました。一昨年の「変」から「新」へ、さらに今年は新しさの中に「明」の展望を見いだしたいものです。

■キーワードは「3E」

とは言うものの、バブル崩壊以降、さらにはリーマンショック、ドバイショックで高まった先行き不安の中で、財布の口は固く閉じられ、自動車をはじめ国内消費の右肩下がりが目立ちます。

松田久一氏の著書によれば、若者たちの消費の3K（嫌い）は「車」「家電」「海外旅行」だそうです。確かに、私たちHRIが実施した大学生意識調査でも、特に男子学生で確認された傾向でした。私が若かった80年代と較べると驚くほどの様変わりです。

しかし、中にはエコポイント関連商品など、探せば右肩上がりや横ばいキープなど、明るい兆しも見つかります。たとえば自転車マーケット、日本の自転車保有台数は約1・5人に1台と世界トップレベルです。05年ごろからはやや横ばい気味ですが、人口減少と少子高齢化の中で大健闘と言えます。

電動アシスト自転車の国内出荷台数は5年間で約50％増の勢いで、昨年には原付バイク国内出荷台数を抜きました。さらに、マウンテンバイクなどの付加価値の高い自転車の出荷台数も増加傾向。最近、自宅近くの駅前一等地にあったドラッグストアが、自転車ショップに変わったのにもうなずけます。エコロジー、エコノミー、エクササイズ、時代のキーワード「3E」を充たせる自転車は、新たな社会の明るいマーケットの兆しと言えそうです。

■レンタサイクルの可能性

期待の「自転車」に注目してみると、自転車本体だけでなく、周辺に生まれ始めたサービスや商品などにも新たなマーケットの兆しが見えてきます。以前このコーナーで「Re系社会」という言葉を使いましたが、レンタサイクルもその一例となるでしょう。

これまでレンタサイクルと言えば、観光地などで安くてフレキシブルな足として利用されていました。しかし、最近ではビジネス街や住宅街、学生街の駅前などでも展開が始まっています。この背景には、生活者、企業、自治体、政府も含めた社会全体のエコロジーへの関心の高まりもあるでしょう。エコ意識が、ライフスタイルやまちづくりに次第に影響を及ぼし始めています。

新たな公共交通システムへの発展を狙って、「コミュニティサイクル」の社会実験が各地で始まっているのは興味深いところです。ビジネス街での事例を一つ紹介します。

東京の中心的ビジネス街である大手町、丸の内、有楽町（大丸有）エリアでは、丸ビルをはじめとして続々と建物のリニューアルと共に再開発が進んでいます。そして、これまでの無機質なビジネス街とは違う、魅力的で活力あるまちへの変貌が進んでいます。

その大丸有地区で、昨秋コミュニティサイクルの社会実験が実施されました。ビジネス街の歩道脇などに自転車の貸出場所（エコポート）を設置し、事前に登録をして登録料を払っておけば、ICカードを使って、いつでも誰でも低料金（30分までは無料）で自転車を利用できるという仕組みです。

晴れた日に私がエコポートの前を通りかかった時は、スーツ姿の若い男性たちが仲間と共に自転車でランチに出かけるところでした。ランチタイムの選択肢も広がったということでしょう。

既にご存知の方も多いでしょうが、レンタサイクルの導入は、いくつかのヨーロッパの都市で、かなりの成功を収めて進展中です。パリ市内で展開されているヴェリブという例では、1500カ所以上のステーションがあり、デザインもよい自転車が2万台以上、のべ利用者数が3000万人という世界最大の自転車サービスとなっています。

「サイクルシェア」を中心事業とする「かりおん」

使い手の満足、ビジネス発展性、地球環境によい公共交通システム、これらのメリットから考えると、まさに豊かさと不安の中にある今という時代のニーズにマッチした「自転車創業」であり、日本の都市でも大いに可能性がありそうです。